

黙示録11章14－19節 「第七のラツパ」

1A キリストのものとなった王国 14－15

2A 長老たちの礼拝 16－18

1B 永遠の全能者 16－17

2B 怒りに対する御怒り 18

3A 至聖所からの災い 19

本文

黙示録 11 章 14 節から見ていきます。まず、本文全体を読みます。(本文を読む)ここにあるように、第七の御使いがラツパを吹き鳴らし、それが天において大きな声があつて、長老たちが礼拝を献げている場面になっています。

1A キリストのものとなった王国 14－15

¹⁴ 第二のわざわいが過ぎ去つた。見よ、第三のわざわいがすぐに来る。

私たちは黙示録を、少しずつ、じっくりと学んでいるので、木を見て森を見ずのように、全体の流れが分からなくなってしまうないように、気をつけないといけません。これまで、力強い御使いが天から降りて来て、開かれた巻物を持っていた幻を見ました。そして、二人の証人が、再建された神殿のことで預言を行なつた場面を読みました。これらは、神殿について、神の大きなご計画があつて、それについての預言も数多くあるので、10 章で御使いがそのことを宣言して、11 章で、神殿についての預言を行っている者の話を、挿入しているのです。

けれども、開かれた巻物に書かれている災いは続いています。イエス様が、天において、父なる神から封じられた巻物を受け取り、その封印を一つ一つ解かれて、最後の封印には、七人の御使いによるラツパの災いがあります。その、神からの戦いの呼びかけと呼ぶべき災いが、地上に対する災いとして降りかかります。

そして、七つのうち最後の三つの災いは、特に酷いものであり、中天に飛ぶ鷲が、災いだ！と三回、叫びました。その第一の災い、つまり第五のラツパは、底知れぬ所から出てくる、いなごの災いです。悪霊どもが、さそりのような毒をもって人々を苦しめるのです。第二の災い、すなわち第六のラツパは、ユーフラテス川のほとりにつながれていた天使が解き放たれ、地獄の炎をもつた二億もの軍馬が駆け巡り、人口の三分の一が殺されます。そして、挿入として、力強い御使いが天から降りて来て、開かれた巻物を持っているという幻と、二人の証人が神殿の前で預言する幻が挿入されていたのです。そして、第三の災い、つまり最後の第七のラツパが、これから吹き鳴らさ

れるのです。

¹⁵ 第七の御使いがラッパを吹いた。すると大きな声が天に起こって、こう言った。「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」

この最後のラッパが吹き鳴らされているのと、第一のラッパが吹き鳴らされる前の出来事と比べてみると良いと思います。8章1節で、「子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。」とあります。しかし、ここでは、「大きな声が天に起こって」とあります。この「声」は複数形なので、「声々」と訳してもいいところです。つまり、いろいろなところから大きな声が天で起こった、というような感じです。ラッパの始まりが静けさがあり、その災いが下って、最後は、天において歓声が上がっている、ということです。主が確かに、聖徒たちのために御怒りを現わしておられるという、神の真実と公正についての賛美であります。

そして、その歓声は、「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。」というものです。ここの「王国」も、複数形になっていまして、「この世の諸々の王国は」というように書かれています。ここの「この世」という言葉には、「神に反抗している世界」という意味合いがあります。「Iヨハ 2:15-17 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」そして、この世については、同じヨハネ第一には、「世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」とあるのです(5:19)。悪魔がこの世の支配者です。

初めは、神の王国のみがありました。神が、王としてすべてを支配しておられました。今も、すべてを支配しておられるのですが、神は人の自由意志を重んじるがゆえ、アダムが罪を犯して、それが人々に入り込み、人々がご自身に反抗し、混乱状態に入っているままにしておかれています。ですから、今は、すべて神の支配の中にあるのですが、神に反抗しているのです。罪の中にいる人が、すべて神の御手の中にあるけれども、神に反抗しているのと同じです。

しかし、主はずっとこのままにしておられるのではありません。なぜ今、神はこの世を滅ぼされな
いか？と言いますと、その中にある人々を一人でも滅びず、悔い改めに導いて、救われたいと願
っておられるからです。「IIペテ 3:9 主は、ある人たちが遅れていると
思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」神の忍耐なのです。

しかし、それは、神が悪に対して無力であるとか、悪に対して無関心であるとか、そういうことで

はありません。神は猶予を与えておられるのであって、期限があるということも覚えなないといけません。主は、不義に対して報いられます。そして、キリストの下にすべてのものを集められ、神の国を建てられる時を定めておられるのです。「エペ 1:10 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」

今、キリスト者は二つの葛藤を持っています。まずは、自分自身の内にある葛藤です。それは、霊は、神の御霊によって贖われているけれども、体の贖いは将来を待っていることです。アダムから受け継いだ罪の性質が体に働いており、霊と肉の確執が続いています。もう一つの葛藤は、この世にある葛藤です。すでに神の子どもとなっていますが、世はそのつながりを憎みます。キリスト者にとって、地上た旅人のようであり、落ち着く先がないのです。天こそが自分の国籍であり、故郷であることを知ります。

しかし、主が、その葛藤を終わらせる時を定めておられるのです。霊と肉の葛藤は、主が再び教会のために戻って来られる時に終わらせます。この卑しい体を、栄光の体、キリストの似姿に変えてくださるのです。そして、もう一つ、世との葛藤は、主が、栄光の姿に変えられた私たちと共に、地上に戻って来られる時です。世にある不義をすべて裁かれて、すべてのものをご自分の支配の下に置き、従わせます。

そして、ここでの、世の諸々の王国は、人間の国々であることにも注目してください。主は、すべての権威を上から与えておられます。国々は、主が立てておられます。ですから、ロマ 13 章にあるように、権威には従うべきです。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」けれども、その立てられた権威が、まるで自分自身にその権威があると思ひ込み、高ぶる姿も聖書は、克明に描いています。イザヤ書には、アッシリアが自分自身に力があるとうぬぼれて、それで裁かれる預言があります。ダニエル書には、バビロンの王ネブカドネツアルが、自分自身を表す金の像を拝ませたり、自分に栄光があるとうぬぼれて、獣のようにされました。その孫、ベルシャツアルは、エルサレムの神の宮にあった器にぶどう酒を注いで、神々を賛美しました。ペルシアの高ぶりもしかり、ギリシアの高ぶりもそうです。そこから荒らす忌まわしい者、アンティオコス・エピファネスが起り、アンティオコス・エピファネスのような人物が、復興ローマから現れ、自分こそが神であると宣言することが預言されています。これらの高ぶりの背後に、悪魔がそのようにさせているのは、言うまでもありません。

ですから、国々が一つとなり、神とキリストに反抗することが、キリストの御国が建てられる前に起こることが、詩篇第二篇に預言されているのです。「詩 2:1-3 なぜ国々は騒ぎ立ちもろもろの国民は空しいことを企むのか。2 なぜ地の王たちは立ち構え君主たちは相ともに集まるのか。【主】と主に油注がれた者に対して。3 「さあ彼らのかせを打ち碎き彼らの綱を解き捨てよう。」こうした、

国々に働いている、反キリストの霊があります。そして、黙示録 16 章には、こうした国々が反キリストの霊におびき出されて、メギドの山、ハルマゲドンに集まることが預言されています。

私たちは今、主が国々を揺り動かし、ご自身こそが神であることを明らかにしていく時代に生きています。主が、ハガイを通して語られました。「2:21b-22 わたしは天と地を揺り動かし、22 もろもろの王国の王座を倒し、異邦の民の王国の力を滅ぼし尽くし、戦車とその乗り手をくつがえす。馬とその乗り手は味方の剣によって倒れる。」天地が、自然が揺り動かされています。そして国々が、世界中でその根底の制度が揺り動かされています。例えば、かつては人の生活や行動基準、移動の自由などは当たり前のことであり、そこに国が入り込んではいけなかったとしていたのですが、コロナ禍によって、国家が制限をかけるのが当たり前になりました。幸い、日本は教会の礼拝に制限はかけませんでしたが、他の多くの国がそうでした。今は、統一協会関係で、宗教の活動に制限をかけるべきだという議論があります。信教の自由は当たり前だと思われたのですが、一気に、制限をかけて良い方向に進んでいます。そして、世界では、昔の戦争だと持っていたことが、今現在行われていたりしています。また、結婚の制度は古今東西当たり前だとされていたのに、同性の間も結婚するなど、結婚の定義が変えられています。こういったことをすべて含めて、国々が揺り動かされています。そして、最終的には神とキリストに反抗しますが、主ご自身がそれらを倒され、力を滅ぼされ、彼らをご自身に従わせるのです。

そして私たちが励まされるのは、主は、こういった将来の幻を、あたかもすでに起こったかのように、先取りして教えてくださることです。主が戻って来られるのは、黙示録 19 章においてで、20 章にならないと、キリストの統治が書かれているのですが、けれども、主がすでに王とされていることを宣言しているのです。ヨハネの福音書にも、世に打ち勝っているとイエスは宣言されましたし、第一の手紙にも、「私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。」と宣言されています(5:4)。私たちの信仰は、勝利から始まっていて、その勝利に向かって今を、逆算して生きていくと言って過言ではありません。

2A 長老たちの礼拝 16-18

1B 永遠の全能者 16-17

¹⁶すると、神の御前で自分たちの座に着いていた二十四人の長老たちが、ひれ伏し、神を礼拝して言った。

久しぶりに登場していますが、神の御座の周りにいる、二十四人の長老たちです。4 章と 5 章で、ヨハネが天に引き上げられてみた、御座の幻に、長老たちがそこにいて、金の冠を差し出して、主を礼拝している姿がありました。また 7 章でも、数多くの、殉教した聖徒たちが天にいたところで、礼拝を献げています。ヨハネには、起こっていることの説明もしています。私たちの地上における、御霊による礼拝が、ここの天における礼拝の延長である、ここでの礼拝と私たちの礼拝がつなが

っている、ということを思います。

¹⁷「私たちはあなたに感謝します。今おられ、昔おられた全能者、神である主よ。あなたは偉大な力を働かせて、王とられました。

長老たちは、感謝しています。まず、神の永遠を宣言しています。「今おられ、昔おられた」と言っています。これは、昔も今もおられ、これからもおられるということです。永遠なる方が、真実をもって今も生きて、働いておられるということです。そして、「全能者」です。どんなことも、不可能ではない方です。その方が、「偉大な力を働かせて、王とられました」と宣言しています。今、私たちはその偉大な力を見てはいませんが、天地を造る、偉大な力を持っておられる方は、イエス・キリストを死者の中からよみがえらせ、やがて、この天地を回復させてくださるのです。

2B 怒りに対する御怒り 18

この偉大な力は、回復の前に、罪と不義に満ちた世を滅ぼされる時に現れます。第七のラツパから、16章に見る、七つの鉢の災いが地上にぶちまけられます。主の御怒りであります。

¹⁸ 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りが来ました。死者がさばかれる時、あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも報いが与えられる時、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時です。」

「諸国の民は怒りました。」とあります。神の権威に対して、人々が怒ります。11章の前半で、二人の証人に対して、彼らは憎み、二人が死んで道端に、倒れているのを、みな喜び、お祝いをしていたところを読みました。闇は光のところに来ようとはせず、むしろ光を憎むのです。それが、怒りとなって現れます。イエス様が十字架に付けられた時に、そこにいた人々が怒りをもって、主をあざけていたことを思い出してください。キリストの平和が来る時に、自分の立つところが揺るがされるので、怒りをもって反抗するのです。

例えば、インドでは爆発的に教会が増えていますが、同時に、爆発的に迫害が広がっています。それは、ヒンズー教では霊的な階級制度がありますが、キリストの福音は、下層にいる人々に届き、その人々に尊厳を与え、教育を施すからです。その階級制度が揺るがされるので、怒りをもって、キリスト者の暴力をふるい、建物を破壊するのです。そして今、直接的にキリスト教に怒りを持っているわけではないですが、しかし、神の権威や秩序に対して、怒りを発する文化が出来ています。結婚は男女のものであると言ったら、例えば、フィンランドでは国会議員のクリスチャンが、刑事告発を受け、刑罰に処せられそうになりました。

これから見ていく姿、12章と13章には、それぞれ神の民が諸国の怒りを受けているところを見

できます。イスラエルが、竜によって滅ぼされそうになっている幻が 12 章に、イエスを証している者たちが獣の像を拝まずに、殺されていくのが 13 章にあります。

しかし、そのことに対して「あなたの御怒りが来ました。」とあります。神が、諸国の民が神の証しに怒っていることに対して、神ご自身が御怒りをもって臨まれるということです。黙示録 16 章における鉢の災いが下るところに現れます。世に属していないために、キリスト者は世から異常な憎しみを受けます。しかし、その怒りに対して、主は御怒りをもって報いられるのです。テサロニケ人に対して、パウロは苦しめている者には苦しみをもって神が報われることを話しました。

ちょっと長い引用になりますが、第二テサロニケ 1 章の 4 節から 10 節までを読みます。「4 ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。5 それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。6 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。8 主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。9 そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前から、そして、その御力の栄光から退けられることとなります。10 その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆の的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。」これは、黙示録 17-18 章において出て来ます。聖徒たちの血を流すことに対して、バビロンを崩壊せしめることが書かれています。

ここでは、「死者がさばかれる時、あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも報いが与えられる時、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時です。」とあります。死者とは、不義を行った者たちが、最後の審判でよみがえり、彼らが裁かれて、火と硫黄の池に投げ込まれることです。そして、預言者や聖徒たち、御名を恐れる者たちに対する報いです。さらに、小さい者、大きな者というのは、すべての人がということの強調です。さらに、「地を滅ぼす者たち」とありますが、反キリストを始め、地上を荒らしに荒らす者たちを滅ぼし、地上に恒久の平和をもたらしてくださる、ということです。

3A 至聖所からの災い 19

¹⁹ それから、天にある神の神殿が開かれ、神の契約の箱が神殿の中に見えた。すると稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、地震が起こり、大粒の雹が降った。

地上における幕屋は、天にあるものの写しであり、模型であることを以前、学びました(ヘブル

10:1)。しかし、ここは天そのものであり、実体であります。「ヘブル 8:1-2 以上述べてきたことの要点は、私たちにはこのような大祭司がおられるということです。この方は天におられる大いなる方の御座の右に座し、2 人間によってではなく、主によって設けられた、まことの幕屋、聖所で仕えておられます。」黙示録 8 章において、香壇も出て来ました。しかしここでは、「契約の箱」が見えています。香の壇は、大祭司が至聖所の前の垂れ幕から、至聖所にその煙を入れていくのですが、そこに契約の箱があります。ここでは、主ご自身がその中心の部分から直接、その聖にしたがって地上に御怒りを下されるということです。16 章の七つの鉢の災いに、御怒りの極みに達した姿を見ることとなります。

そして、神殿の中から、稲妻、雷鳴、自身、大粒の雹が落ちています。シナイ山に天から主が降りてきた時にも起こった現象です。主ご自身が今、天からの栄光をもって偉大な力を、このような形で現わされるのです。

私たちは、こうした公平な裁きを行われる主を知っているのですから、地上に残されている間、この方を恐れかしこんで、生きなさいと勧められています。